計画経済時代を生きた中国女性はどのように子育てをしていたのか
―職業女性へのインタビュー分析から―

朱　　奕　雷

はじめに

本稿の目的は，女性の社会進出が大きく打ち出された計画経済時代（1949～1977年）[1]の中国において，社会的生産労働に参加する一方で家事や育児といった家庭内労働の責任を同時に背負った当時の職業女性が，いかに仕事と家庭の両立を模索したのかについて，実証研究から究明することである。

伝統中国社会においては，「良妻賢母」，「相夫教子（夫を助け子を教育する）」が理想的な女性像であり，家事や育児といった家庭内労働の役割が極めて強調されていたことは周知のことがらである。このような伝統的な性別役割分業は，五四新文化運動以降，進歩的な知識人によって批判され，女性の社会進出を提唱するような議論が出てきた。その議論はあくまでも知識層にとどまっていたので，結果的には，中国全体の女性解放が実現できなかった[2]。

その一方，1949年に中華人民共和国（以下：新中国）が成立して以降，マルクス主義的女性解放の理論に基づいて，女性の解放はすなわち経済的自立であると中央政府は提唱し，女性の社会的進出を強力に推進した。1978年時点では，都市部の女性の就業率は1953年の11.7％から32.7％へと倍増し，男性に近づいた[3]。

計画経済時代には，「女性にとって経済的自立がなければ，本当の自立はない」という政府のスローガンの下で，就業そのものが女性にとって政治的身分を獲得する重要な基礎となっていた。その結果，就業は特に都市の女性にとって「選択せざるを得ない権利と義務」となっており，「職業を持つ母」が大衆化されるようになった[4]。

しかしながら，女性の公的領域での権利が認められる一方，家庭内部のジェンダー秩序については伝統的な性別役割分業が依然として継続し，家庭内における無償の再生産労働の負担は，計画経済時代においても存続していた。

計画経済時代における中国の社会構造は，欧米社会のように公私の区分がはっきりしておらず，「公私鑲嵌」（公私は繋がり，重なりあう），「私嵌入公」（私的領域はあくまで公的領域の一部）という特徴を持っていた[5]。そのような社会構造の中で，男女を問わず公的領域での生産労働が重要視される一方，家庭内労働はほとんど注目されてこなかった。

これまでの先行研究は，女性の公的領域での役割に焦点を当てたものが多いが，計画経済時代の女

性像をより全面的に把握するために，職業女性の家庭内での役割に目を向け，妻としての女性，そして母親としての女性を理解することも不可欠であると考える。

そこで，本研究では，これまで注目されてこなかった計画経済時代の私的領域における女性像に焦点をあてて，職業女性たちは，いかに家事や育児といった家庭内労働に携わってきたのかをミクロな視点から明らかにすることを試みる。

本研究により，これまで注目されてこなかった中国の計画経済時代の職業女性像および母親像についての研究に，新たな示唆を与え得ると考える。

1．先行研究

謝（2020）[6]と張（2021）[7]は1949～1966年に発行された，『人民画報』と『人民日報』における女性のロールモデルに関わる言説を分析し，計画経済時代に唱えられた理想的な女性像は，社会主義的国家建設のために献身する労働婦女であると指摘した。

その一方，尹（2009）は，1950年代から1960年代までの『中国婦女』誌で行われた女性の仕事と家庭の両立に対する論争を分析し，1950年代後半と1960年代においては，女性の家事と育児の負担を軽減するべきであるという議論が明確に主張されるようになったものの，このような女性の主体性を要求する思想は当時の政治状況下で弾圧されたとする。結局，1950年代から1960年代にかけて中国女性が勝ち取ったとされた解放は，家庭内では引き続き家事，育児の仕事を引き受けながら，社会労働に参加するという，二重負担に耐えながら得られた表面的な解放であったと結論づけた[8]。

また，左（2005）は，建国直後の1950年代を生きた職業女性に焦点を当てた研究を行い，社会的生産労働と家庭内労働の二重の負担を背負った当時の女性は，家事労働と仕事の両方に，かなりの時間と労力を費やさねばならなかった。その結果，子育ては後回しにされるようになったと指摘した[9]。

さらに，金（2013）の研究では，なぜ計画経済時代の中国においては，女性に対する育児の責任が隠蔽されたのかを当時の児童観から明らかにした。計画経済時代では，子どもは家庭の子としてではなく，「祖国の花」や「共産主義の後継者」などのように，国家の子として扱われた。そこで，育児は私的領域での労働としてではなく，公共的責任として扱われた。このような児童観の下で，政府は親の就労時間に合わせて，子どもを保育する施設を職場や社会で整備するようになり，いわゆる児童公育が実現した。そのため，「職業を持つ母」たちは，伝統的な母親規範の下でもたらされた育児不安やストレスが大きく軽減され，仕事を第一義とした生活をするようになり，公的領域での自己価値の実現に専念するようになった[10]。

これまでの先行研究では，計画経済時代の女性は，仕事と家庭の二重負担を背負ったことが明らかにされた一方，当時の職業女性は，この二重の負担に対して，どのように認識したのか，そして，いかなる葛藤が生じたのか，そこから生じた葛藤をどのように正当化して受け入れたのかは，いまだ解明されていない。

そのため，本研究では，インタビューの手法を用いて，計画経済時代を生きた職業女性の語りから，彼女たちが仕事と家庭の両立に直面した困難，及びその解決策を明らかにすることを試みる。

2．調査対象と概要

本研究では，計画経済時代を生きた職業女性の子育て実態を把握するために，1930 年代から 1940 年代生まれ，計画経済時代で子育てしていた 9 人の職業女性に向けて，半構造化インタビュー調査を実施した。調査を実施した時期は 2021 年 3 月～5 月である。

本研究の調査対象者は全員，都市部の工場，病院，または政府機関で働いた経験を持つ女性である。また，本調査の対象者は当時の社会において，比較的に高いホワイトカラー層に位置していた女性である。彼女たちの子育て実態を考察するために，①子育ての担い手，②子育ての支援者，③家庭内の役割分担，④子育ての内容（子どもの養育と教育），⑤仕事と家庭の両立に直面した困難と解決策の五つの項目に従い，インタビュー調査を行った。

調査を実施する際，調査目的と守秘義務について説明し，対象者の許可を得た上でインタビューを録音した。また，得られたデータは匿名で記録し，個人情報が特定されないよう配慮した。分析方法については，録音した内容から逐語録を作成し，それらを意味内容の類似性に基づいてコーディングした。

調査対象の属性については，表 1 に示した通りである。

表 1　調査対象者の属性

	出生年	職業	学歴	子どもの出生年
敏	1933	学校医	大専卒	1962
				1965
				1973
芬	1940	教　員	大　卒	1964
				1971
柏	1940	教　員	大専卒	1965
				1966
				1970
莉	1938	教　員	大　卒	1963
				1965
琳	1937	医　師	中専卒	1962
				1968
芸	1943	公務員	中専卒	1967
				1971
				1972
宋	1935	エンジニア	大　卒	1964
				1967
				1976
梅	1934	看護師	中専卒	1960
				1965
文	1942	エンジニア	大　卒	1970
				1973

３．研究結果

本節では，第１節で明らかにした問題意識に基づいて，①計画経済時代を生きた職業女性の二重負担，②仕事と家庭を両立するためのツールという２つの部分に分けて，仕事と家庭の二重負担を背負った当時の職業女性は，公的・私的領域で形成されたジェンダー規範をいかに認識したのか，そして，そこから生じた葛藤を乗り越えるために，どのような子育て支援を活用し，子育ての負担を軽減したのかを分析してみる。

3.1　計画経済時代を生きた職業女性の二重負担

（1）公的領域で活躍した職業女性たち

「女性は天の半分を支える[11]」と唱えた毛沢東時代のジェンダー・イデオロギーの下で，仕事は女性たちにとって，一家族を支えるための手段だけではなく，政治的地位と社会的価値を構築するための重要な指標でもあった。

マルクス主義的解放理論に基づいて唱えられた計画経済時代の女性解放の思潮に合わせて，当時の主流的な刊行物である『人民日報』や『中国婦女』から発信された理想的な女性像は，社会的生産労働に参加し，社会主義建設のために尽くし，それぞれの業界でリーダーシップを発揮した女性であった[12]。

マスメディアで描かれた社会主義的生産労働に献身的な職業女性は，ロールモデルとして当時の一般女性にも強い影響を与えた。

例えば，今回の調査者である琳は，子育てをしていた時期においても，キャリアアップするために全身全霊で仕事をしていた様子を以下のように述べた。

> 「1969 年には，私は自分のキャリアを考えて，看護師から医師になることを決意した。その時はとても忙しかった。しかし，その機会を失うと，一生，医師になる機会がないかもしれないので，一生懸命努力した。当時は娘が生まれたばかりの時期だったが，娘には三ヶ月しか授乳しなかった。それ以降の子どもの世話はすべて私の母が担当してくれた。私は毎日，二本のミルクを買って，母が娘にミルクを飲ませた。（筆者注：娘は）今でもミルクが嫌だとよく言う。当時の私は仕事のために，大きな犠牲を払った。」（琳）

琳のような仕事に献身した職業女性は，計画経済時代の中国においては珍しくない。梅もインタビューの中で，子育てをしていた時期においても，キャリアアップするために夜間学校に進学し，一生懸命努力した様子を語った。琳と梅は最初，共に市内の公立病院で看護師として働いたが，琳は 1960 年代末には看護師から医師になることに成功した。その一方，梅は，看護師という仕事に熱意を持ち，自分の専門技術を向上させるために，夜間学校や各種の研修を受けることで，看護師長まで

に昇進した。

(2) 伝統的性別役割分業を暗黙的に受け入れた職業女性たち

女性たちは公的領域でリーダーシップを発揮するために一生懸命努力していた姿が見られる一方，家庭内においては，伝統的な性別役割分業が依然として存続していたため，家庭内労働も引き受けていたことが計画経済時代の特徴である。

今回の調査の中で，家庭内労働の役割分担については，ご飯を作ることや子どもの世話などはほとんど女性側が担っていたことが確認できた。

例えば，柏は，若い頃の生活を以下のように語った。

「以前の生活は，今と雲泥の差がある！ あの時は本当に辛かった。朝，5時になったら起きて，まずは一家族の1日分の食料品を買ってこなければいけなかった。野菜や魚などを買って帰って，全ての食材を洗ってから職場に行った。昼になったらすぐ家に帰って，昼ごはんを作る。隣にあるお婆さんがいて，時々彼女に練炭ストーブを着火してもらっていた。そうすれば私は家に帰った後すぐ昼ごはんをつくることができる。毎日忙しく追われていて，本当に苦しかった。」（柏）

柏が語ったように，仕事をする一方，家族の食事作りなどの家事も担っていた職業女性は，毎日忙しく過ごしていた。実際，インタビューの対象者に若い頃の生活を振り返ってもらった時，ほとんどの対象者は，「とても忙しかった」と回想している。計画経済時代を生きた仕事以外に家事労働をやる必要がある女性は，ほとんど休む時間がなく，芬が述べたように「自分の睡眠時間を削るしかなかった。仕事と家庭を両立するために，骨身を惜しまず働いた」というように，朝から夜まで休みなく働いたのが現実である。

しかしながら，このような家庭と仕事の両立に努力した当時の職業女性たちは，公的・私的領域で形成された二重のジェンダー規範に疑問を感じていたというより，私的領域での伝統的性別役割分業を暗黙のうちに受け入れていたと言えよう。

今回のインタビュー対象者はすべて，女性が家庭内労働の責任を担うべきであることを当然視しており，家庭と仕事を両立できる女性こそ社会主義的新中国を生きる新婦女であるという共通の理解を持っていた。

家庭と仕事の両立について苦痛を感じたのかについて，多くのインタビュー対象者は「全く不満がない」と語った。柏が述べた「文句や不満は全くなかった。若い頃には，心をこめて家族のために自分を捧げただけだ」が代表的である。計画経済時代を生きた職業女性たちは，家庭内における伝統的性別役割分業の存在に対して，肯定的な態度を持っていることが今回の調査から明らかになった。

また，1980年代以降の中国社会に出現した家事と育児に専念する専業主婦について，多くの調査対象者は否定的な態度を持っていた。なぜ専業主婦に否定的なのかについては，孫の発言が非常に象

徴的である。

「女性の独立が一番大事なことだ。家庭と仕事は矛盾しないと思う。（筆者注：仕事と育児の両立を図るために）自分は確かに苦労をしたが，最終的には，仕事と育児の両方とも成功した。」（孫）

当時の女性は，なぜ自身が背負った家庭と仕事の二重の負担を肯定的に捉えたのかについては，左（2005）が指摘したように，毛沢東時代に唱えられた男女平等が，西洋のフェミニズム理論に基づく個人的解放ではなく，民族や国家建設のための「義務上の平等」であるからである[13]。計画経済時代では，男女問わず国民は「国家の人」として扱われ，国家建設のために公的・私的領域におけるジェンダー規範が構築されるようになった。そのため，公的領域においては，女性たちは社会的生産労働を通して，男性とともに直接的に国家を建設する体制が実現した一方，私的領域においては，女性は家事労働や国家の子としての子どもへの養育を通して，間接的に社会主義的国家建設のために貢献したと理解できるだろう。

また，今回の調査対象である女性たちは，当時の社会において，比較的に高いホワイトカラー層に位置していた。彼女たちは工場，病院，あるいは政府機関で勤め，管理職，さらには幹部であった。彼女たちの職業的な成功が，このような国家イデオロギーを受け入れることを容易にしたことも考えられる。

3.2　仕事と家庭を両立するためのツール：育児援助ネットワークの活用

仕事と家庭の両立を模索した計画経済時代を生きた職業女性たちがこの二重の負担を解決するツールは，育児援助ネットワークの活用であったことが今回の調査で明らかになった。

計画経済時代の中国においては，子どもが国家の子として扱われるようになり，親の就労時間に合わせて子どもを保育する制度が整備されるようになった。また，親族や同僚，隣人からの子育て支援も充実し，これらの子育て支援は，職業女性の育児負担の軽減には多大な効果があると思われる。

以下では，(1) 国から提供された子育て支援，(2) 親族からの子育て支援と (3) 同僚や隣人からの子育て支援の 3 点に分けて検討する。

(1) 国から提供された子育て支援

計画経済時代の中国においては，親の育児不安を解消することと職業女性のニーズに応えるために，託児所[14]や幼児園[15]などの保育施設が設置された。託児所と幼稚園の数について，1957 年の 1 万 6 千カ所から 1960 年の 78 万カ所までに倍増し，ほぼ全ての工場と国営企業の中で設置されるようになった[16]。

今回の調査対象者の中には，子どもを小さい頃に託児所や幼児園に預けた女性たちが少なくなかった。中でも，子どもに寄宿制[17]の託児所に送ったケースも多い。

例えば，柏は3番目の子どもを寄宿制の託児所に送ったことについて，以下のように述べた。

「3番目の子どもは寄宿制の託児所に預けた。私と夫は共働きなので，なかなか子育ての時間がなかった。長男は夫の母のところに預けた。2番目の子どもは母に助けてもらった。3番目の子どもは誰にも助けてもらえなかったので，寄宿制の託児所に送った。月曜日の朝に子どもをそこに送って，金曜日の夜に子どもを迎えにいった。」（柏）

柏が語ったように，子どもを寄宿制の託児所に預けたケースは少なくない。梅も次男が生まれた後，自分の母親の体が悪かったため，親族に子育て支援が求められず，次男を全託制の託児所に送ったと述べた。

寄宿制の託児所に預けるほか，もっとも普遍的に見られるのは，職場の中で設置された全日制の託児所に送ったケースである。今回の調査の中で，芬，琳，芸は子どもが小さい頃，職場の中に設置されていた託児所に子どもを預けた経験があると語った。

(2) 親族からの子育て支援

国から提供された子育て支援のほか，一番よく利用されていたのは親族からの子育て支援である。今回の調査では，祖父母をはじめとした親族からの子育て支援を活用した職業女性は，柏，琳，芸，文，宋，梅の6人である。

6人の中には祖父母や親族と同居する形で子育て支援を求めた家族もいれば，子どもを祖父母や親族の家に預けるという形で子育て援助を求めた家族もいる。

文と芸は，自分の親と異なる都市に住んでいたので，子どもを親がいるところに預けたことを語った。

「娘が離乳した後，仕事しながら子育てをするのは大変なので，娘を母が住んでいるA市に預けた。」（芸）

「子どもの小さい頃には，私の母が育ててくれた。母はずっと実家にいたので，長男が2歳になってから，私たちは長男を実家の母のところに預けた。」（文）

芸と文は，両親と離れて住んでいたが，子育て支援を求めるために，子どもを両親のところに住み込ませるしかなかった。それに対して，残る柏，琳，宋，梅の4人は，両親やその他の親族と同居か近居していたため，子育て支援を求めやすかった。

梅は姉と両親と同居していたので，子どもたちを姉と母がそばで育ててくれたことを以下のように語った。

「夫は軍人なので，2人の子どもが生まれた頃には家にいなかった。私1人で子育てするのは無理だったので，姉と母のところに預けた。私たちは当時，大家族で生活していた。私たち家族と姉一家族，そして両親と同居していた。姉は無職だったので，子どもの世話や普段の家事などはすべて姉と母が担当した。（中略）私は当時，仕事がとても忙しかった。子育ての時間がぜんぜん取れなかった。子どもたちは6歳までに姉を「母」，私を「おばさん」と呼んだ。」（梅）

祖父母などの親族と同居や近居している場合，子どもの世話のほか，家事労働などの援助も得られる。このような親族からの子育て支援は，職業女性が仕事と家庭のバランスを取ることに大きな役割を果たし，女性たちが公的領域での生産労働に専念ができるようになったと思われる。

(3) 同僚や隣人からの子育て支援

敏と莉は文化大革命の時期，都市部から農村へと子連れでの下放[18]を経験した。下放先である農村においては，託児所や幼児園などの保育施設もなく，親族からの子育て支援も得られなかった。このような厳しい状況の中で，隣人や職場の同僚からの援助を得ることで，彼女たちは仕事と家庭の両立が実現できたとインタビューで明らかにした。

敏は，当時3歳の次男と一緒に下放先に連れていかれ，農村にいた頃の生活を以下のように述べた。

「1968年，職場が農村に下放された。私も子どもを連れて農村に送られた。当時次男はまだ3歳であり，まだ小学校に入れなかった歳だった。しかし，農村には，「託児所」も「幼児園」も一切なかったので，隣人である小学校の先生は，私1人で2人の子どもを見ながら仕事をするのをとても大変であると感じ，次男を小学校1年生のクラスに入れることを提案してくれた。どうせ行くところもなかったので，その先生が教えている小学校1年生のクラスに行けば，私がいない場合に先生が子どもを見てくれると思ったので，同意した。なので，次男はまだ3歳だったのにすでに1年生のクラスで昼間の生活を過ごしていた。一緒に読書したり，歌を歌ったりした。今から振り返ってみると，楽しかった。」（敏）

近隣や職場の同僚からの子育て支援は不可欠であったことは容易に想像できる。敏と同じように，莉と芬も親族からの子育て支援と国からの育児支援がともに利用できない中，近隣からの助けをもらっていたことを語った。

計画経済時代においては，国，親族と近隣が提供した子育て支援により，当時の職業女性たちの育児負担を大きく軽減したことが今回の調査から明らかにした。

しかしながら，計画経済時代の子育て方法を，育児の精緻化が進む現在中国の子育て方法と比較した場合，大きな差異があると考える。

子どもを養育・教育する責任が強調されている現在の中国と比べ，計画経済時代においては，育

児とは子どもの日常的な世話に集中していた一方，子どもを教育する意味が比較的薄かったと思われる。

今回の調査では，子どもの宿題を見たり，早期教育や学校外教育を行なったりした家庭は極めて少ない。このような子育ては，計画経済時代という特殊な時代背景から解明することができる。子どもを国家の子として捉えられた計画経済時代の中国においては，育児は家庭の責任であり，国の責任でもあった。子どもの養育は家庭内だけではなく，時には集団によって行われた。しかし，市場経済が進む 1980 年代以降の中国社会においては，計画経済時代という「公私鑲嵌」の社会構造から脱し，公的・私的領域がはっきりと分離されるようになった。そのため子育ては，毛沢東時代には公的領域と私的領域の両方にまたがっていたのに対し，改革開放以降の中国においては完全に私的領域に位置づけられ，子どもを養育・教育する責任は国家ではなく，家庭が担うべきであることが強調されるようになったからである。

終わりに

本稿は，女性の社会進出が唱えられた計画経済時代を生きた中国の職業女性は，公・私領域で形成された二重のジェンダー規範をどのように認識したのか，また，仕事と家庭の両立を実現させるために，いかに子育てしていたのかを実証研究から明らかにすることを課題として設定した。

研究結果として，計画経済時代を生きた職業女性たちは，公的領域での生産労働を通して社会的価値と政治的地位を獲得するために，仕事に多くの精力と時間をかけていた。その一方，私的領域では伝統的な性別役割分業が依然として保持されており，家庭内労働のほとんども彼女たちが引き受けていた。

しかしながら，このような家庭と仕事という二重の負担を背負った当時の職業女性たちは，公的・私的領域で形成された二重のジェンダー規範に対して，ほとんど疑念を抱かず，肯定的な態度で捉えていた。その理由として，毛沢東時代に唱えられた男女平等は，民族や国家のために構築された「義務上の平等」であったからであると思われる。このような「義務上の平等」に基づいて，女性たちは公的領域での生産労働を直接的な国家建設のためであると認識していた一方，家事労働や育児という私的領域での生産労働を間接的な国家建設のためであると受け入れたのである。

家庭と仕事の両立を実現させようとした当時の女性たちは，国，親族と近隣から提供された育児援助ネットワークを活用することで，育児の負担を軽減したことが今回の調査から解明された。

計画経済時代の中国においては，職業女性のニーズに応えるために，託児所や幼児園などの保育施設が職場の中で設置された。女性たちのニーズに応じて，半日制，全日制だけではなく，時には寄宿制の託児所も設置された。このような柔軟的な保育制度は，職業女性の育児負担の軽減に大きな役割を果たしていた。

国が提供した子育てに対する援助のほか，もっともよく利用されていたのは親族からの子育て支援である。両親（子どもから見ると祖父母）をはじめとした親族と同居もしくは近居していた場合，子

育て支援だけではなく，家事労働の援助が得られる場合もあった。

国や親族からの子育て支援が活用されたほか，同僚や近隣からの子育て支援も，当時の職業女性にとって仕事と家庭の両立のための不可欠な一環であった。今回の調査では，文革中に子連れで農村に下放された職業女性が，国や親族からの子育て支援が提供されない中，同僚や近隣からの子育て支援を受けたケースがあった。彼女たちは，同僚からの支援があったからこそ，仕事と育児の両立が実現できた。

計画経済時代を生きた職業女性の子育て方法は，市場経済が進む現在の中国女性と比べ，大きな差がある。子どもの養育と教育にかなりの時間と多額の資金をかける現在の中国に対して，計画経済時代を生きた女性たちは，子どもの養育を日常の世話に集中した一方，子どもを教育する部分にはあまり関心を寄せなかった。このような子育ては，計画経済時代という「公私鑲嵌」の社会構造から影響を受けたものであり，公的・私的領域が明確に分離されてこなかった計画経済時代の中国において，子どもを養育，教育する責任は家庭だけではなく，国の責任でもあると捉えられたからである。

本稿では，計画経済時代を生きた職業女性たちへのインタビュー調査から，育児と家庭の両立を模索した女性が，どのように子育てしていたのかを考察した。本研究の対象は中間層に位置していた女性であるため，当時の職業女性の全体像の把握は十分ではない。今後の課題としたい。

注(1)　計画経済体制とは，経済の資源配分を国家の計画によって配分する体制である。生産，配分，流通，金融を全て国家が統制し，全ての生産手段が公有とされる。中国においては，1949 年の中華人民共和国が成立以降から計画経済体制が実施され，1978 年の改革開放政策まで持続した。

(2)　虞（2006）は，中華民国時代で行われた「良妻賢母」に関する議論に対する分析から，1919 年の五四新文化運動が開始された以降，女性の人格を目覚めさせようとし，良妻賢母問題について再考を促したが，そのような議論はあくまでも先進的知識女性の願望にとどまっており，当時の社会状況から見ると，容易に実現できなかったと指摘した。（虞萍，2006,「中国の良妻賢母論の諸相について―胡適の〈超良妻賢母〉論と冰心の〈新良妻賢母〉論を中心に」,『若者研究者研究成果報告論集』（1），95～103 頁）

(3)　佟新，1999,「社会変遷与中国婦女就業的歴史与趨勢」『婦女研究論叢』（01），39 頁

(4)　鄭楊，2021,「三重の期待―中国都市家族における母親規範のロジック―」坂部晶子編『中国の家族とジェンダー―社会主義的近代化から転形期における女性のライフコース―』，明石書店，85 頁

(5)　宋少鵬，2012,「従彰顕到消失：集体主義時期的家庭労働（1949 ― 1966）」,『江蘇社会科学』（1），117～118 頁

(6)　謝宇星，2020,「『人民画報』（1950 ― 1966）女性形象建構的分析和思考」『新聞研究導刊』11（21），54～55 頁

(7)　張静，2021,「1949－1966 年人民日報対新中国女性媒介形象的建構分析」『新聞研究導刊』12（09），149～151 頁

(8)　尹鳳先，2009,「仕事と家庭の両立を模索する女性たち― 50 年代から 60 年代までの『中国婦女』誌を中心に―」『ジェンダー研究』（12），107～122 頁

(9)　左際平，2005,「20 世紀 50 年代的婦女解放和男女義務平等：中国城市夫妻的経歴与感受」『社会』（01），182～209 頁

(10)　金一虹，2013,「社会転型中的中国工作母親」『学海』（02），56～63 頁

(11)　「女性能頂半辺天」という，毛沢東時代の代表的な女性解放のディスコースである。

⑿　前掲（7），「1949 ― 1966 年人民日報対新中国女性媒介形象的建構分析」，151 頁

⒀　前掲（9），「20 世紀 50 年代的婦女解放和男女義務平等：中国城市夫妻的経歴与感受」，204 頁

⒁　「託児所」は計画経済時代の中国における設置された 0～3 歳の子どもを保育する機関である。

⒂　「幼児園」は，3～6 歳の子どもを教育する幼児教育の機関である。日本の幼稚園に相当する。

⒃　唐淑，銭雨，杜麗静，鄭影，2009,「中華人民共和国幼児教育 60 年大事記（上）」『学前教育研究』（9），66～69 頁

⒄　計画経済時代の中国においては，親の就労ニーズに合わせて，「託児所」や「幼児園」などの保育施設は全日制，寄宿制，半日制，季節制といったさまざまな形態をとることが可能である。中でも「全託」と呼ばれる寄宿制の育児施設の設立は，社会主義国家としての中国に特有の保育制度であるといえる。（一見真理子，2010,「中国における早期の子育て事情『一人っ子』『市場経済化』『早期からの教育』の各政策のもとで」『教育と医学』58（6），504 頁）

⒅　敏と莉によると，文化大革命の中で，都市部の学校教育や社会的生産労働が一切停止されたため，敏と李が勤務していた学校は全て農村に送られ，教員や職員たちもそれぞれ農村部の小学校，中学校に配属された。そのような動きは，当時では，「下放」あるいは「下遷」と呼ばれる。